二つのNO-DIG国際会議に参加して

黒岩　正信
KUROIWA　Masanobu
日本メックス㈱
（本誌編集企画小委員長）

JSTTが募集した国際会議に伴う視察団に1992年と2007年に参加して，国際会議でもそれぞれ発表しました。その時の思い出とその後の出来事を思いつくまま書いてみようかと思います。

1．NO-DIG 1992ワシントン

1992年の国際会議は米国の首都ワシントンで開催され，視察団の日程では最初の方に会議がありました。視察団は大阪ガスの表所長を団長として，4月4日～16日の日程で35名が参加しました。日本はまだバブル景気の中にあり，会議の後に東海岸から西海岸までいろんな場所を訪問することができて，印象深い旅になりました。90年代前半は，非開削の国際会議も新しい技術分野という熱い雰囲気があって，質疑応答も活発でした。日本からの発表が多かったこともあり，日本語と英語の同時通訳ブースも設置されていました。

会議ではNTTの通信ケーブルを収容するためのトンネル「とう道」の建設前の地盤調査に適用するために開発した都市内で連続的な地盤調査が可能な弾性波探査技術「浅層反射法」について発表しました。

また，NTTで開発した埋設物探査機エスパーについて，研究所の人が発表するのを聞いていた英国の探査機メーカーの方から明日の朝食の時に話を聞きたいという要望があり，通訳的な役割で同席したようなこともありました。

ワシントンでは，日本から送られたポトマック川沿いの桜が満開の花を咲かせていて，現地の人も桜の花のトンネルの下を楽しそうに歩いていました。スミソニアン博物館には古い航空機から宇宙開発の月面着陸船や月の石などの実物が広大なスペースに展示されていて，時間が足りない感じでした。

ワシントンからニューヨークに移動して，ブルックリンガスを訪問しました。昨年注目されたトランプタワーはこの時既にティファニーに隣接して金色に輝いていました。まさかこのビルオーナーが米国大統領になる日が来るとは，その時は想像もしませんでした。

2014年に日本で公開された「大統領の執事の涙」も実話を基にした好い映画でした。夕方，ハドソン川からイースト川までのディナークルーズに参加した時には，ワールドトレードセンターの二つのビルはアメリカの繁栄を代表するように輝いていました（**写真－1**）。その後，2001年の同時多発テロで消えてしまったのは，ご存知の通りです。

また，2009年1月15日には，「ハドソン川の奇跡」と呼ばれる航空機事故の現場にもなったハドソン川ですが，2016年に映画化され，わずか208秒しかない時間の中で冷静に対応したパイロットの行動と短時間で救助した通勤フェリーなどの活躍で乗務員・乗客155人全員が救出されるドラマに感動しました（**写真－2**）。

ディナークルーズでは，ワインを取り替えてもらうという珍しい場面もありました。添乗員の女性が，最初に提供されたワインのボトルを見た瞬間に交換を要求したのです。通常のレストランでは代表者が試飲して提供されるのでこの女性の対応にびっくりするとともに，持ってきたボーイもすんなり引き下がったので，適切な対応だったのだろうと思います。

写真－1　イースト川から見たワールドトレードセンター

写真－2　映画のポスター

ニューヨークからフロリダに移動して現場を見た後，シアトルまで途中給油して斜め横断して北上しましたが，日本がすっぽり入っても余るような距離のこのフライトで，アメリカの大きさを実感しました。カナダに隣接しているワシントン州シアトルはマイクロソフト本社やボーイング本社があるので，その関係で来たのかと聞かれたりしましたが，港町らしく新鮮な魚貝類と地元のワインが美味しかったのが記憶に残っています。また，イチローが渡米する前の古い球場で大リーグの野球も見ました。ニューヨークとは違う坂道のある港町シアトルの夜景もきれいでした（写真－3）。

この時の出張報告はマッキントッシュのHyperCardを使って写真入りで作り込みをして大会議室で行いました。HyperCardはカード毎に訪問先の情報を作ると，カード内に設定したボタンをクリックすることで，必要なカードが表示されるというもので，今のインターネットと同じようなハイパーテキストの機能を持っていました。まだWindowsのない時代に，恐らくパソコンを使ってプレゼンテーションを行った初期の出来事だったと思います。1年後にこの内容をビデオテープに録画してBGMも入れて，この旅に参加した皆さんにお配りして喜ばれたのも思い出しました。

2. NO-DIG2007ローマ

2007年の国際会議はイタリアの首都ローマで開催され，今回は訪問日程の最後の方に会議が設定されていました。この旅は，JSTT松井会長が団長の19人の視察団で，9月6日から14日の日程で，ミラノの空港に着いて，ピサ，フィレンツェ，ローマと視察しながら移動しました。斜塔で有名なピサでは，埋設物探査機メーカーのIDSを訪問しました。この時の通訳はフィレンツェ在住の日本人エリさんで，専門用語も適確に使われていてベストの通訳でした（写真－4）。エリさんの話では夜になるとフクロウが鳴くという良い環境にお住まいのようで羨ましく思いました。

IDSでは，「ピサに来て斜塔を見ないなんて信じられない」と言われる程忙しいスケジュールでした。ルネサンスの雰囲気そのままのフィレンツェは訪問先もなくゆっくり過ごせた旅になりました。ウフィッツィー美術館では「ヴィーナスの誕生」などルネサンス時代を代表する有名な絵画や彫刻の本物を間近にたくさん見ることができました。また，イタリアは職人の国のようで，大学進学する人は少ないという話も聞きました。小さな靴屋からスタートして世界的なブランドに成長した会社を支えているのも，伝統を守る誇り高い職人たちです。フィレンツェ市内の皮製品のお店で，お土産のバッグや財布などを買ったら，ホテルに直接届けてくれるというので，少し心配でしたが，

写真－3　シアトルの夜景

写真－4　フィレンツェを歩く後姿の右がエリさん

写真－５　額に入った鳩の羽とコイン

写真－６　ローマの居酒屋？さんで歓談

手ぶらで歩き回れる良いサービスだと思いました。ホテルに帰ってフロントで確認したら届いてないと言われて少し慌てましたが，近くに居た人が部屋に入れてあるというので，部屋に急ぐと，無事に届いていて安心しました。

街中のスーパーマーケットで，ペットボトルのミネラルウォーターを購入したら随分安かったのも印象的で，お釣りの小銭はそのままお土産になりました。ローマで拾った鳩の羽とこの時の小銭は小さな額に入れて私の部屋に飾ってあります（写真－５）。

ローマの国際会議の最終日に，とう道の排水管調査用に開発した90度のエルボーがいくつかある配管の調査ができる点検カメラについて発表しました。会場は小さく同時通訳も無かったので，英語での質疑応答になりましたが，なんとかスムーズに対応することができました。日本のガス会社の人がその発表を聞いていて，具体的なデモを帰国後に国内で実施することになりました。

発表が終わった日の午後は，一人で地下鉄に乗り，スペイン広場からトレビの泉までぶらぶら街歩きをし，ジェラートを食べたりしてのんびりしました。この散歩の最終目的地は三越ローマ店で，「日本円にして2000円程度で飲み食いしよう！」というメンバー数人と待ち合わせていました。先に出かけていたメンバーが三越ローマ店の近くのお店で働いていた日本人の女性に紹介してもらったお店に路面電車で向かい，飲み始めました。ギターを持った流しの人が来たりしてローマの夜らしいこともありましたが，地元の人が集まるオープンカフェのような店で，紹介してくれた女性も合流して適当に食べ物を取って日本の居酒屋と同じような感じでビールやワインを飲んで精算したら，ほとんど目標に近い金額になりました。特にワインの地元価格は日本の3分の1程度ではないかということで，大満足の最後の夜になりました（写真－６）。

その後，ローマの中心のテルミニ駅前のバスターミナルからホテルに向かったのですが，違うバスに乗ったりして苦労しました。運転手さんもバス停の名前を言わないで運転しているだけなので，自分で気をつけていないといけないシステムで，近くに居た学生風の人にホテルの名前を伝えて，近くのバス停に来たら教えてもらうようにお願いして無事に帰ることができました。私の半日だけの「ローマの休日」はこのようにしてトラブルもあったけれど楽しい思い出になりました。私の生まれた昭和28年に日本で公開された「ローマの休日」はオードリー・ヘップバーンの美しさと若さが輝いている良い映画でした。

国内・国外の旅で訪問した街や出会った人々の記憶は，無意識にどこかに蓄えられていて，何かがきっかけになって，突然鮮明に思い出すことがあります。ここまで，二つの国際会議に参加した時の事を思い出すままに，その後の出来事も含めて書いてきました。

テレビドラマの脚本家で直木賞作家の向田邦子さんの言葉を最後にご紹介して終わりにしたいと思います。向田さんは思い出が脈絡なく繋がって出てくることを「ねずみ花火」（父の詫び状）というエッセーの中で，次のように表現しています。

思い出というのはねずみ花火のようなもので，いったん火をつけると，不意に足許で小さく火を吹き上げ，思いもかけないところへ飛んでいって爆ぜ，人をびっくりさせる。